

資料

高校生における激しい怒りを喚起させる出来事に対する 認知の特徴と男女間比較

石田実知子*¹ 井村亘*² 山形真由美*³ 渡邊真紀*^{2,4} 小池康弘*⁵

要 約

高校生における怒りのコントロールに関する問題は、自傷行為や他害行動を含め、様々な健康問題や心理・社会的な問題にも関連する極めて重要な優先課題である。本研究は、高校生を対象に激しい怒りを喚起する出来事に対する認知の特徴および、その男女差を明らかにすることを目的とした。調査対象は普通科高等学校に通学する1年生～3年生327名であり、自由記載による質問紙調査を実施した。回収は311名であり、分析に必要な調査項目に記述のある301人分のデータを使用しベレルソンの内容分析の手法に基づき分析を行った。また、カテゴリ分類の信頼性を確認するため、上記分類の一致率を Scott WA の式の計算式に基づき舟島らの判断基準を用いて求めた。性差については χ^2 の適合度検定を行った。高校生の激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知として、他者帰属認知、自己帰属認知、自己統制認知の3つに分類された。その内、他者帰属認知、自己帰属認知が9割以上を占め、男女間比較では他者帰属認知は男子が有意であり、自己帰属認知、自己統制認知は女性が有意であった。Scott WA の式によるカテゴリ分類の一致率は8割以上であり、基準を満たしていた。本研究結果は、高校生の自傷行為に対する有効な支援方法の開発に対して一定の示唆を与えると考える。本研究の結果より、高校生に激しい怒りを喚起させる3つの分類に対する認知の変容に対する有効な支援方法の開発に対して一定の示唆を与えると考える。

1. 緒言

高校生の時期は、生物学的な成熟に伴う心身の変化、親子・友人関係の変化、将来の方向性の選択を迫られるなど心理的側面や行動に影響を及ぼす時期である。そのため、性衝動や感情を統制することにかかわる葛藤から攻撃性の高まりも強く、小学生や中学生と比較し不快情動やストレス反応が増加することが報告されている¹⁾。攻撃性とは一般的に、怒りや敵意などの感情を含む心理特性のことを指し、その方向・対象は、他者や物といった外界の対象だけではなく、自分自身にも向けられる²⁾。前者は非行や暴力、ときには殺傷にもつながる反社会的行動を、後者は自傷行為や摂食障害などの非社会的行動を起こすことに関連している³⁾。また、激しい怒り

を感じた時の対処行動に関する研究において自傷行為および他害行為を何らかの形で「する」としたものは、自傷行為では、25%以上、他害行為では11%以上の学生が占めていることが報告されている^{4,5)}。

加えて、これらの行為は自殺にも繋がるのが危惧され⁶⁾、高校生における怒りのコントロールに関する問題は、様々な健康問題や心理・社会的な問題にも関連する極めて重要な優先課題であるといえよう。

ところで、行動と感情は認知理論から捉えると、体験の受け止め方である認知により決定され、認知の変容によって行動と感情の変化が生じるとされる⁵⁾。換言するならば、同じ体験をしてもそれをどのように捉えるかによってその時に感じる感情は異なる⁷⁾。つまり、怒りはストレスを引き起こす出来

*1 川崎医療福祉大学 保健看護学部 保健看護学科

*2 玉野総合医療専門学校 作業療法学科

*3 山陽学園大学 看護学部 看護学科

*4 岡山大学大学院 保健学研究科 博士後期課程

*5 川崎医療福祉大学 医療技術学部 リハビリテーション学科

(連絡先) 石田実知子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : m-ishida@mw.kawasaki-m.ac.jp

事に対するストレス反応であるものの、その出来事の受け止め方である認知によって怒り感情の喚起の有無およびその程度が決定される。また、怒りの表出方法において、適切な表出であると認知しているほどその表出方法が実行される可能性が高いため、怒り表出の実行予測において、認知的側面を考慮することが有効であることが示されている⁸⁾。さらに対人関係によって生じるストレス認知は、怒りに繋がりがやすく、結果的に精神的健康に対して強い負の影響力を持つこと⁹⁾が明らかとなっている。そのため、怒りに対する適応的な行動に向けての支援において、怒りを認知的側面、感情的側面、行動的側面から捉え、これらの3つの側面をターゲットにした認知行動療法の有効性が実証されている^{10,11)}。認知的側面における感情制御においては、状況や出来事の意味（捉え方）を認知的に変化させることによって、感情の強さや種類をコントロールすることが可能となる¹²⁾。このように、怒りに対して認知的側面に留意した介入を行うことで、より適応的な行動を促し精神的健康を維持・向上できることが明らかになってきている。しかし、我が国における高校生を対象とした怒りに関する研究は散見されるに留まっており、中でも激しい怒りを喚起した時の認知的特徴を実証的に明らかにした研究は皆無である。また、ストレスの感じ方や捉え方や怒りの表出には男女差があることも明らかになっていることから^{13,14)}、怒りを喚起する出来事に対する認知にも男女差があることが想定されるが、性差に関する検討している研究も見当たらない。高校生の激しい怒りを喚起する出来事に対する認知の傾向や性差を考慮した上で適切な介入・援助を行うためには、認知に着目してその様相を明らかにすることが急務である。

以上から本研究は、高校生における激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知の特徴および、その性差について明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 研究デザイン

本研究は、高校生の記述内容を質的帰納的に分析する記述的探索的デザインとした。

2.2 調査対象者

調査対象は、A県の市街地に位置する普通科高等学校1校で、保護者および高等学校長から同意の得られた高校生1～3年生の全生徒327名（男子：191名、女子：128名）を対象とした。この内、欠席等を除く311人から回答を得た（回収率95.1%）。分析にはこれら回答のうち分析に必要な調査項目に記述のある301名分のデータを使用した（有効回答率

92.0%）。内訳は、男子、189名（62.8%）、女子、112名（37.2%）であった。学年別では1年生98名（32.6%）、2年生98名（32.6%）、3年生105名（34.8%）である。

2.3 調査実施期間およびデータ収集方法

調査は2017年4月～6月に実施した。データ収集方法は、集合式調査法とした。調査にあたっては、クラス担任を通して生徒に自記式質問紙を配布した。自記式質問紙の設問は、「最近1カ月に制御できない（抑えきれない）くらい激しい怒りを感じる（喚起させる）出来事があった時、どのような考えが浮かんできましたか？自由にお書きください」とした。調査内容は、性別・学年および前記設問に対する回答としたなお、教示は各クラスとも共通の教示文により実施した。

2.4 分析方法

まず、得られた全回答データをベレルソンの内容分析の手法¹⁵⁾を用いて質的帰納的に分析した。ベレルソンの内容分析は「表現されたコミュニケーション内容を客観的、体系的、かつ数量的に記述するための調査方法であり、コミュニケーションの中でも、文字などの記述内容を対象とした内容を扱う」ことから、本研究の調査内容に即していると判断し、本分析手法を採用した。

具体的な分析においては、ベレルソンの内容分析の定義に基づき、記述全体を文脈単位、激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知に関する記述の1内容を1項目として含むセンテンスを記録単位とした。

- 1) 全回答の素データ一覧表を作成し、素データから記録単位を原文のまま抽出した。記録単位抽出においては、「問いに対応していない記述」、「意味を理解することが困難な記述」、「そのような経験がないなどの記述」は、分析者間で検討を繰り返した後に分析対象から除外した。
- 2) 抽出した記録単位数を算出した。なお、1人の回答に複数の異なる内容の記録単位が含まれる場合、1内容を1記録単位として集計した。
- 3) 記録単位の意味内容が損なわれないように、できるだけ回答に記された言葉を用いて、簡潔な表現でコード化した。
- 4) 得られたコードについて、分析者間で意味内容の類似性に基づいて分類する作業を繰り返し、その意味を表すように表現し、サブカテゴリとした。
- 5) サブカテゴリのうち、さらに意味内容が同類のものを集め、抽象度を高め、共通の意味を表すように表現し、カテゴリとした。

- 6) さらに、カテゴリに共通性があるものを集約した。
7) カテゴリに分類された記録単位の出現頻度を数
量化し、カテゴリ毎に集計した。

次に、各カテゴリに共通する認知のタイプを集約
した分類の、男女間の記録単位数の差の有無につい
て χ^2 の適合度検定を行い検定した。有意水準は、
両側検定で5%未満とした。データの集計、統計処
理には、Microsoft Excel 2018 とその関数計算機能
および、js-STAR version 9.7.8j を用いた。

2.5 カテゴリの信頼性

分析者の主観を最小限にし、カテゴリの信頼性を
確認するため、全記録単位の10%のコードを無作
為に研究者が抽出し、その記述単位を本研究に携
わっていない2名の質的研究に精通する専門家に、
本研究で生成されたカテゴリへ分類するように依
頼した。カテゴリ分類への一致率を Scott WA の計
算式¹⁶⁾に基づき舟島らの判断基準を用いて70%以上
を信頼性確保の基準とした¹⁷⁾。なお、Scott WA の
式は、 $\pi = Po - Pe / 1 - Pe$ で求められる。 π は
Scott の一致率であり、 Po は研究協力者と研究者が
一致したカテゴリ数÷研究者の作成したカテゴリ数
であり、 Pe は全体の記録数に占める各カテゴリの
記録数の割合を2乗し、全てのカテゴリを足したも
のである。この式を用い、カテゴリの一致率を算出
することは、偶然から生じる一致を加味した上でそ
の頻度を補正した一致率を得ることができるとされ
ている。

2.6 倫理的配慮

本研究は、研究協力校の校長および保護者の承認
を得た上で実施した。また対象者には、白紙での提
出も可能なこと、研究の任意性、中断の自由、不利
益の回避、研究目的のみのデータの使用、データの
保管と破棄、研究結果の公表について質問紙に明記
し、実施時にはクラス担任が口頭で説明した上でア
ンケートへの協力を求め、結果公表に際しては匿名
性を保証した。調査票とともに各個人の秘密を厳守
するための個別の封筒を配布し、生徒自身によって
厳封された調査票の回収箱への提出をもって研究参
加の同意とした。提出後同意撤回の意思表示がなさ
れても、調査は無記名で実施するため回答者を特定
できず、研究データとして分析されてしまうこと、
調査票の回収に関しては強制しないこと、調査時
には教師は生徒の目に入らない位置にいること、回
収箱は教員の目につかない場所に設置することを各ク
ラス担任に依頼した。調査を通して、気分の悪化を
訴えた生徒はいなかった。なお、本研究は川崎医療
福祉大学の倫理委員会の承認（承認番号17-100）を
受け実施したものである。

3. 結果

3.1 高校生の激しい怒りを喚起させる出来事 に対する認知

分析対象となった301人分の記述は333記録単位に
分割された。このうち、「問いに対応していない」
32記録単位、「意味を理解することが困難な記述」
20記録単位、「そのような経験がないなどの記述」
24記録単位の、計76記録単位を除く257記録単位を
分析対象とした（表1）。その257記録単位を意味内
容の類似性を基に分類した結果、20サブカテゴリが
生成され、抽象度を高め8カテゴリが抽出された。

以下、コードを《 》、サブカテゴリを〈 〉、カ
テゴリを【 】で表した。また、〔 〕内には、カ
テゴリを形成したコード数および記録単位総数に対
する割合を表した。

3.1.1 【他者への非難】〔96記録単位：37.4%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起
きた際に、その相手に対し非難を向けている認知で
あり、〈わがままだ〉〈はなしにならない〉という2
つのサブカテゴリで構成された。〈わがままだ〉に
は《なんて自分勝手なんだ》《いつも身勝手なこと
ばかりする》などのコードがあり、相手から自分勝
手で不誠実な扱いを受けていると思う認知であっ
た。〈はなしにならない〉には《妙なことをぬかす
んじゃない》《なんでそんなこともわからないんだ》
のなどのコードがあり、相手が理解していないこと
に非難を向けた認知であった。

3.1.2 【報復】〔45記録単位：17.5%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起
きた際に、その相手に対し許せない思いを強く抱く
報復型の認知であり、〈殺してしまいたい〉〈永遠に
いなくなればいい〉〈仕返しをしてやりたい〉〈勘弁
ならない〉という4つのサブカテゴリで構成された。
〈殺してしまいたい〉には《いっそ殺してしまいた
い》《死ぬ》などのコードがあり、〈永遠にいなくな
ればいい〉には、《死んでしまえばいいのになあ》《消
えていなくなればいいのに》などのコードがあった。
これらは、前者は直接的に、後者は間接的に相手の
死を思い浮かべる認知であった。〈仕返しをしてや
りたい〉には、《同じことをしてやる》《ボコボコに
してやる》などのコードがあり、〈勘弁ならない〉
には、《お前だけは絶対に許さん》《ふざけんよ》
などのコードがあった。これらは、相手に仕返しを
することや絶対許さないことを心に刻む認知であ
った。

3.1.3 【投げやり】〔21記録単位：8.2%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起
きた際に、出来事とその相手に対し関わりたくない

表1 激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知

分類	カテゴリ	サブカテゴリ	コード (例)	記録単位数 (257)			男女比較 χ ² 検定	
				合計	男	女		
他者非難		わがままで	・なんて自分勝手なんだ ・いつも身勝手なことばかりする	38	96 (37.4%)			
		はなしにならない	・妙なことをぬかすんじゃない ・なんでそんなこともわからないんだ	58				
他者帰属	報復	殺してしまいたい	・いっそ殺してしまいたい ・死ぬ	8	141 (54.9%)	88 (71.0%)	53 (39.6%)	P < .01
		永遠にいなくなればいい	・死んでしまえばいいのに ・消えていなくなればいいのに	9				
		仕返しをしてやりたい	・同じことをしてやる ・ボコボコにしてやる	11				
		勘弁ならない	・お前だけは絶対に許さん ・ふざけんなよ	17				
投げやり		どうでもいい	・どう思われたっていい ・どうなろうとかまわない	12	21 (8.2%)			
		めんどろ	・じゃまっけだ ・うざい	9				
悔恨		悔やまれる	・なんでこんなことになってしまったんだろう ・残念だなあ	6	40 (15.7%)			
		自分のせいだ	・自分が悪いんだ ・申し訳ない	34				
自己帰属	自己否定	無力だ	・何をやってももうまくいかないなあ ・自分は何もできないなあ	2	99 (38.5%)	32 (25.8%)	67 (50.0%)	P < .01
		情けない	・ふがいないなあ ・嘆かわしいなあ	4				
	存在価値がない	・自分って何なんだろう ・自分には何の価値もないなあ	13					
	死んでしまいたい	・誰よりも早く死にたいなあ ・消えたいなあ	5					
	絶望	誰も信用できない	・人は信じられないなあ ・誰も信じられないなあ	7				
		考えが浮かんでこない	・何も考えられないなあ ・頭まっしろ、お先真っ暗	7				
自己制御		冷静になろう	・怒ってはいけない、怒ってはいけない ・落ち着け、落ち着け	2	4 (1.6%)			
		この場を収めよう	・深呼吸しなきゃあ ・この場から離れよう	2				
対応の模索		どう対応したらいいんだろう	・どうすれば聞いてくれるだろう ・この状況をいかに打破したらよいだろう	4	13 (5.1%)			
		距離を置いて対応をしよう	・しばらく会わないようにしよう ・話さないでおこう	9				

と思う投げやり型の認知であり、〈どうでもいい〉〈めんどろ〉という2つのサブカテゴリで構成された。

〈どうでもいい〉には《どう思われたっていい》《どうなろうとかまわない》などのコードがあり、出来事やその相手との関係がどうなっても構わず成り行き任せにする認知であった。〈めんどろ〉には《じゃまっけだ》《うざい》などのコードがあり、出来事やその相手を煩わしく不快に思う認知であった。

3.1.4 【悔恨】〔40記録単位：15.7%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起きた際に、出来事とその相手に対し悔やむ思いをもつ悔恨型の認知であり、〈悔やまれる〉〈自分のせいだ〉という2つのサブカテゴリで構成された。〈悔やまれる〉には《なんでこんなことになってしまったんだろう》《残念だなあ》などのコードがあり、なぜこのようになったのか、その成り行きを残念に思う認知であった。〈自分のせいだ〉には《自分が悪いんだ》《申し訳ない》などのコードがあり、こうなったのは自分に原因があると悔やむ認知であった。

3.1.5 【自己否定】〔19記録単位：7.5%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起きた際に、それまでの自己を否定する受け止め方

あり、〈無力だ〉〈情けない〉〈存在価値がない〉という3つのサブカテゴリで構成された。〈無力だ〉には、《何をやってももうまくいかないなあ》《自分は何もできないなあ》などのコードがあり、自分の在り方に矛盾を見出し、力がないと思う認知であった。

〈情けない〉には《ふがいないなあ》《嘆かわしいなあ》などのコードがあり、自分の非力さを残念に思う認知であった。〈存在価値がない〉には《自分って何なんだろう》《自分にはなんの値打ちもないなあ》などのコードがあり、自分の存在の意味を失う認知であった。

3.1.6 【絶望】〔19記録単位：7.5%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起きた際に、希望を失い自殺念慮や不信感を抱く絶望型の認知であり、〈死んでしまいたい〉〈誰も信用できない〉〈考えが浮かんでこない〉という3つのサブカテゴリから構成された。〈死んでしまいたい〉には《誰よりも早く死にたいなあ》《消えたいなあ》などのコードがあり、自分の死を思い浮かべる認知であった。〈誰も信用できない〉には《人は信じられないなあ》《誰も信じられないなあ》などのコードがあり、信頼を失い孤独に思う認知であった。〈考

えが浮かんでこない)には《何も考えられないなあ》《頭まっしろ、お先真っ暗》などのコードがあり、思考が停止し絶望的に思う認知であった。

3.1.7 【自己制御】〔4記録単位：1.6%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起きた際に、怒りの高まりを制御しようとする自己制御型の認知であり、〈冷静になろう〉〈この場を収めよう〉という2つのサブカテゴリで構成された。〈冷静になろう〉には《怒ってはいけない、怒ってはいけない》《落ち着け、落ち着け》などのコードがあり、怒りを抑えるよう自分に言い聞かせようと思う認知であった。〈この場を収めよう〉には《深呼吸しなきゃあ》《この場から離れよう》などのコードがあり、この場を収めて怒りを冷まそうと思う認知であった。

3.1.8 【対応の模索】〔13記録単位：5.1%〕

このカテゴリは、激しい怒りを感じる出来事が起きた際に、どのように対応すれば解決できるかという対応の模索型の認知であり、〈どう対応したらいいんだろう〉〈距離を置いて対応しよう〉という2つのサブカテゴリで構成された。〈どう対応したらいいんだろう〉には《どうすれば聞いてくれるんだろう》《この状況をいかに打破したらいいんだろう》などのコードがあり、怒りの渦中で解決に向けた対処に思いを巡らせる認知であった。〈距離を置いて対応しよう〉には《しばらく会わないようにしましょう》《話さないでおこう》などのコードがあり、ひとまず相手と距離を整えようと思う認知であった。

3.2 カテゴリの分類〔他者帰属認知141記録単位：54.9%、自己帰属認知99単位：38.5%、自己統制認知17記録単位：6.6%〕

抽出された8カテゴリは、認知のタイプから、他者帰属認知、自己帰属認知、自己統制認知の3つに分類された。他者帰属認知は、他者が責めを負うべきという認知であり、【他者への非難】【報復】の2カテゴリが含まれた。自己帰属認知は、自己が責めを負うべきという認知や自分自身を否定的に捉えた認知、将来を考えない行動へと繋がる認知であり、【投げやり】【悔恨】【自己否定】【絶望】の4カテゴリが含まれた。自己統制認知は、怒りの高まりを制御し、解決に向かう認知であり、【自己制御】【対応の模索】の2カテゴリが含まれた。

3.3 カテゴリの一致率

研究者が無作為に全記録単位の約10%にあたる26記録単位を抽出し、その26記録単位を2名の質的研究に精通する専門家に本研究で生成されたカテゴリに分類するように依頼した。その結果、26記録単位中、順に22記録単位、23記録単位のカテゴリが一致していた。その割合を Scott WA の式¹⁵⁾に当ては

めて算出したところカテゴリ分類の一致率は、順に81.7%、86.6%となり、カテゴリが信頼性を確保していることを示した。

3.4 カテゴリの分類における性差

他者帰属認知、自己帰属認知、自己統制認知における男子全体および女子全体の中で占める割合は、表1の通りであった。男子では、他者帰属認知：88記録単位（71.0%）、自己帰属認知：32記録単位（25.8%）、自己統制認知：4記録単位（3.2%）であった。また、女子では他者帰属認知：53記録単位（39.6%）、自己帰属認知：67記録単位（50.0%）、自己統制認知：13記録単位（10.4%）であった。 χ^2 の適合度検定の結果は、他者帰属認知は男子の方が有意に多く（ $\chi^2=8.688$, $df=1$, $p<.01$ ）、自己帰属認知および自己統制認知は女子の方が有意に多かった（自己帰属認知： $\chi^2=8.688$, $df=1$, $p<.01$ 、自己統制認知： $\chi^2=4.765$, $df=1$, $p<.05$ ）。

4. 考察

本研究は、高校生を対象に激しい怒りを喚起する出来事に対する認知の特徴および、その男女差を明らかにすることを目的とし、ベレルソンの内容分析の手法に基づき内容分析を行った。また、カテゴリの一致率を Scott WA の式を用いて信頼性を確認した。

4.1 分析手法選択の信頼性

本研究で採用したベレルソンの内容分析は、内容分析の中でも言語的に記述されたものをデータとするという特徴を持った内容分析の手法である。また、対象を記述の外面的意味に限定し、それから推測可能なコミュニケーションを発した人の意図や効果を考慮に入れないことを意味している¹⁷⁾。本研究は、自由記載から得られた記述的データをもとに記録単位で分析し、分類・命名することによって客観的に激しい怒りを起こす出来事に対する認知を明らかにしていることから、ベレルソンの内容分析を分析手法として選択したことは妥当であったと判断できる。また、ベレルソンは、内容分析は客観的でなければならぬと述べており、誰がいつ分析するかにかかわらず、同じ条件のもとでは、同一の内容は同一のカテゴリに属すると判断できるよう十分精密かつ包括的なカテゴリに設定するための言及事項分析型の内容分析に限定している¹⁷⁾。本研究の分析において、本研究に携わっていない質的研究に精通する専門家に独立したカテゴリ化を依頼し、カテゴリの一致率を Scott WA の式を用いて信頼性を確認した。その結果、カテゴリ分類の一致率は舟島の基準を満たしていた。以上のことから、本研究結果は信

頼できるものであると考える。

4.2 全体からみた激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知

4.2.1 他者帰属認知

他者帰属認知に含まれた【他者への避難】は全体の中で最も多く96 記録単位 (37.4%)、【報復】は45 記録単位 (17.5%)、これらを合わせると141単位 (54.9%) であり、半数以上を占めていた。このことは高校生が激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知として、他者が責めを負うべきであると認知していることを示していると考えられる。高校生の時期にあたるこの時期は、対人葛藤も強く様々な問題行動や身体的・精神的症状を示す生徒が少なくなく、攻撃性の高まりが強いことも特徴である¹⁸⁾。このことは本研究結果において、全記録単位の中で【他者への避難】が一番多かった背景の1つと推察される。また、激しい怒りは「キレる」といった現象にも繋がり、その根底には一般に否定的と捉えられる情動状態が関与し、キレた時は、自己調整機能が十分に機能していない状態で攻撃性が意図的意思とは無関係に生じているとされる¹⁹⁾。そしてこれらの攻撃性は非行行動やいじめ加害との関連も報告されている²⁰⁾ことから、「(仕返しをしてやる) (殺してしまいたい)」といった【報復】は、非行や暴力ときには殺傷にもつながる危険性が危惧される。

4.2.2 自己帰属認知

自己帰属認知に含まれた【投げやり】は21 記録単位 (8.2%)、【悔恨】は40記録単位 (15.7%)、【自己否定】【絶望】はともに19 記録単位 (7.5%) であり、これらの認知を合わせると99記録単位 (38.9%) であった。激しい怒りを喚起させる過剰なストレスに遭遇すると原因が自分にあると評価し、「なんでこんなことになってしまったんだろう」《申し訳ない》と【悔恨】が起っていた。過去の出来事に対して目指すべき方向に解決されていない場合、怒りの維持が行われる²¹⁾が、悔恨により出来事の防止や制御に繋がる行動が明確になりやすくなったり、出来事に対する意味づけに結び付く可能性が示されていることから²²⁾、認知の変容に繋がっていると推察される。しかし、反面で意味を見出すまでの思考過程にはストレスが伴うと推測されるため²²⁾、ストレス反応が強い場合等、必要に応じた支援が求められる。一方で【投げやり】【自己否定】【絶望】については、怒りと同時に抑うつが生起する²³⁾ことを鑑みると、深度の違いこそあるが抑うつ気分にも繋がりやすい認知と考えられる。また、外的無力感や問題回避は自己否定的な認知に繋がり、将来否定の認知を引き起こすことが示されていることから²⁴⁾、【投げやり】

【自己否定】はともに【絶望】との関連が推察される。怒りは抑うつと同様に自傷行為とも関連し²⁵⁾、自殺とも関連していること²⁶⁾、自殺に追いつめられる子どもの心理として、強い怒りや強い自己否定感、絶望感が共通点を挙げられること²⁷⁾から、自殺の危険性にも留意した注意深い対応が求められるといえよう。

4.2.3 自己統制認知

自己統制認知に含まれた【自己制御】は4記録単位 (1.6%) 【対応の模索】13記録単位 (5.1%) であり、これらの認知を合わせると17記録単位 (6.7%) となり、そのうち【自己制御】は全認知の中で最も少なかった。《怒ってはいけない、怒ってはいけない》の【自己制御】は、怒りがこみ上げる前に初期の兆候に自分で気づいて、考えや言葉や行為によってそれを落ち着かせる方法である²⁸⁾。また、《深呼吸しなきゃあ》《この場から離れよう》の深呼吸や居場所を変えることは同様に怒りに対する対処法として身に着けるべきものである²⁸⁾。これらは、起こった出来事に巻き込まれることなく置かれた状況を客観視することで解決に向けての第一歩となる²⁹⁾。また、【対応の模索】は、起こった出来事に対し、現在に軸を置き、前向きに何ができるか検討していると考えられる。このような認知は、怒りの対処行動における状況分析⁵⁾に繋がる認知と考えられ、認知行動療法に基づく怒りのコントロール教育においても有効な方法である²⁹⁾。

4.3 性差からみた激しい怒りを喚起させる出来事に対する認知

4.3.1 他者帰属認知

男女比較により、他者帰属認知は男子が有意に多いことが示された。従来の研究結果によると怒り喚起そのものには男女差はないものの、その表出は男子の方が女子よりも攻撃行動を示しやすいことが示されている³⁰⁾。また、男子では暴力の正当化や暴力的反応傾向・暴力への衝動が強く³¹⁾、男子では情動反応を介さず、ストレスとなる刺激事態によっても攻撃行動が触発されやすいことが報告されている³²⁾。これらのことから、男子は女子と比較して激しい怒りを喚起する出来事に遭遇した時、他者への非難や報復といった認知が行動に繋がりやすいのではないかと考えられる。

4.3.2 自己帰属認知

男女比較により、自己帰属認知は女子が有意に多いことが示された。日本の青年期を対象とした自尊感情に関する研究によるメタ分析によると女子の方が男子と比較して自尊感情が低く³³⁾、自尊心とうつ状態には高い正の相関関係が認められている³⁴⁾。思

春期は産褥期、更年期とともにうつ病が発症しやすい時期であり³⁵⁾、一般的に、抑うつを引き起こす原因としては、物事を否定的にとらえる認知の歪みの影響が関係していると言われている⁶⁾。加えて思春期・青年期の女子は自己評価が顕著に低く³⁶⁾、失敗を内的、安定的、一般的な事象として捉えやすいという原因帰属の傾向から、過度に自分を責めがちであると言われている³⁷⁾。そのため、女子では自己の内面に目が向きやすく、自己帰属認知が高い傾向にあるのではないかと推察される。

4.3.3 自己統制認知

男女比較により、自己統制認知は女子が有意に多いことが示された。自己統制認知に含まれる自己制御や対応の模索は、情動的回避や問題解決に向けての認知であると考えられた。高校生を対象とした研究結果によると、情動的回避、問題解決ともに男子より女子が有意であることを示しており¹⁾、この点と一致する結果であったと言えよう。不快情動への態度からストレスへの因果モデルの検討において、不快情動を切り変えられる可能性の高さは男女ともに問題解決が媒介し、快情動の促進やストレス反応の低減に影響することが示されている。また、女子は不快情動への拒否感から問題解決への影響がみら

れ、男子では不快情動の拒否感が‘大声をあげて怒鳴る’といった行動的回避を増大させ、ストレス反応に結び付きやすいことが示されている。これらのことから男子に対しては、不快情動への拒否感を低減させる関りが有効である¹⁾。

本研究の限界として、対象者は限られた地域の普通科1校の生徒のみであり、調査校の特徴のみが反映されたサンプリングバイアスの懸念があること、学年による変化が本研究の結果に影響を与えた可能性を否定できない。また、今回は激しい怒りを喚起させる出来事に対する考え（認知）をデータとして抽出しているため、具体的な出来事のタイプによる認知の詳細な特徴は明らかとなっていない。今後、出来事、さらには感情や行動にも焦点をあて、詳細に検証を重ねていかなければならないものと思量する。加えて、自由記述法は、他の評価方法と比較すると調査協力者自身の自発的な回答姿勢に影響すること、学生個々の文章力に差があることから結果の解釈には慎重な解釈を要する。今後は、研究対象を広げサンプル数の蓄積を図り、学科・課程・学年等個々の詳細な分析を行い、個々の特徴を明らかにすることも残された課題である。

謝 辞

本研究にご協力くださいました対象者の皆様、高校の教諭の方々、指導いただきました先生方に感謝申し上げます。なお、本研究は、JSPS 科研費17K12579の助成を受け、まとめたものの一部である。なお、本研究に際して開示すべきCOIはない。

文 献

- 1) 小澤永治：思春期における不快情動への態度とストレスの関連。心理学研究, 81(5), 501-509, 2010.
- 2) 坂井明子, 山崎勝之：攻撃概念の細分化と形成過程。美作大学・美作大学短期大学部紀要, 49, 1-7, 2004.
- 3) 広瀬仁郎：思春期の子の怒りと正義感—すぐ怒る子・怒れない子—。児童心理, 56(1), 76-80, 2002.
- 4) 石田実知子, 江口実希, 國方弘子：思春期用自他への暴力行動尺度の開発。社会医学研究, 35(2), 13-19, 2018.
- 5) Ishida M, Dei R, Kunikata H, Imura W, Watanabe M and Nakajima K : Development of the Anger Coping Behaviors Style Scale for high school students. *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, 23(1), 1-9, 2017.
- 6) 大野裕：認知療法・認知行動療法治療者用マニュアルガイド。星和書店, 東京, 2010.
- 7) Spence SH : Practitioner review: Cognitive therapy with children and adolescents: From theory to practice. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 35(7), 1191-1228, 1994.
- 8) 木野和代：対人場面における怒りの表出方法の適切性・効果性認知とその実行との関連。感情心理学研究, 10(2), 43-55, 2004.
- 9) 石田実知子, 井村亘, 渡邊真紀：高校生の精神的健康に対する対人ストレスおよび怒りに対する対処行動の関連。国際ナショナル Nursing Care Research, 18(2), 23-30, 2019.
- 10) 金築智美, 金築優, 根建金男：大学生の怒り特性の変容に及ぼす認知行動療法の有効性。教育心理学研究, 56(2), 193-205, 2008.
- 11) Zarshenas L, Baneshi M, Sharif F and Sarani EM : Anger management in substance abuse based on cognitive behavioral therapy: An interventional study. *BMC Psychiatry*, 17(1), 375, 2017.
- 12) Gross JJ and Thompson RA : Emotion regulation: Conceptual foundations. In Gross JJ ed, *Handbook of emotion regulation*, Guilford Press, New York, 3-26, 2007.

- 13) 田中生雅, 荒武幸代, 大西幸美, 田中優司: 2016年度学生定期健康診断時のメンタルヘルス状況調査より学生への健康支援を考える. 愛知教育大学健康支援センター紀要, **15**, 17-20, 2016.
- 14) Hyde JS: How large are gender differences in aggression? A developmental meta-analysis. *Developmental Psychology*, **20**(4), 722-736. 1984.
- 15) バーナード・ベレルソン著, 稲葉三千男, 金圭煥訳: 内容分析. みすず書房, 東京, 1957.
- 16) Scott WA: Reliability of content analysis: The case of nominal scale coding. *Public Opinion Quarterly*, **19**(3), 321-325, 1955.
- 17) 舟島なをみ: 質的研究への挑戦. 医学書院, 東京, 2007.
- 18) Dryfoos JG: Adolescents at risk: Shaping programs to fit the need. *Journal of Negro Education*, **65**(1), 5-18, 1996.
- 19) 長櫓涼子: 「キレル」現象に関する中学生の解釈・状態の分析. 上田女子短期大学紀要, **35**, 41-50, 2012.
- 20) 濱口佳和: 学校における問題・不適応行動と攻撃性. 山崎勝之, 島井哲志編, 攻撃性の行動科学—発達・教育編—, ナカニシヤ出版, 京都, 135-151, 2002.
- 21) 遠藤寛子, 湯川進太郎: 怒りの維持過程における思考の未統合感に影響を及ぼす諸要因の検討. 心理学研究, **84**(5), 458-467, 2013.
- 22) 上條菜美子, 湯川進太郎: ストレスフルな体験の意味づけにおける感情—出来事の種類のふまえて—. カウンセリング研究, **49**(1), 11-21, 2016.
- 23) Berkowitz L: On the formation and regulation of anger and aggression: A cognitive-neoassociationistic analysis. *American Psychologist*, **45**(4), 494-503, 1990.
- 24) 福井至, 坂野雄二: 抑うつと不安における不合理な信念と自動思考および気分の関連. 人間福祉研究, **3**, 1-12, 2000.
- 25) 高柳伸哉, 伊藤大幸, 岡田涼, 中島俊思, 大西将史, 染木史緒: 一般中学生における自傷行為のリスク要因—単一市内全校調査に基づく検討—. 臨床精神医学, **41**(1), 87-95, 2012.
- 26) Hawton K, Rodham K, Evans E and Weatherall R: Deliberate self harm in adolescents: Self report survey in schools in England. *British Medical Journal*, **325**, 1207-1211, 2002.
- 27) 文部科学省: 教師が知っておきたい自殺予防.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/04/13/1259190_12.pdf, 2009. (2019. 9. 16確認)
- 28) 戸田有一: 子どもをキレさせないおとなが逆ギレしない対処法—「キレ」の予防と危機介入の実践ガイド—. 北大路書房, 京都, 2006.
- 29) Peter Schwenkmezger, Georges Steffgen, Detlev Dusi, 市村操一訳: 怒りのコントロール—認知行動療法理論に基づく怒りと葛藤の克服訓練—. プレーン出版, 東京, 2004.
- 30) 日比野桂, 湯川進太郎, 小玉正博, 吉田富二雄: 中学生における怒り表出行動とその抑制要因. 心理学研究, **76**(5), 417-425, 2005.
- 31) 朝長昌三, 福井昭史, 地頭菌健司, 小島道生, 中村千秋, 小原達朗, 柳田泰典: 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善—高校生の攻撃性について—. 長崎大学教育学部紀要教育科学, **72**, 37-48, 2008.
- 32) 古屋健, 音山若穂, 坂田成輝: 高校生の心理的ストレス過程に関する研究 III—身体反応と問題行動—. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, **57**, 151-168, 2008.
- 33) 岡田涼, 小塩真司, 茂垣まどか, 脇田貴文, 並川努: 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析. パーソナリティ研究, **24**(1), 49-60, 2015.
- 34) 宮崎由子: 思春期・青年期女性における摂食行動障害者の心理的・栄養的特性の解析. 栄養学雑誌, **68**(2), 65-77, 2010.
- 35) 杉山暢宏, 田名部はるか: うつ病の性差について. 信州医学雑誌, **66**(3), 185-193, 2018.
- 36) 高田利武: 自己概念の特質と形成. 加藤隆勝, 高木秀明編, 青年心理学概論, 誠信書房, 東京, 33-49, 1997.
- 37) 大江由香, 亀田公子: 犯罪者・非行少年の処遇におけるメタ認知の重要性. 教育心理学研究, **63**(4), 467-478, 2015.

Characteristics of Recognizing Events Evoking Intense Anger in High School Students

Michiko ISHIDA, Wataru IMURA, Mayumi YAMAGATA, Maki WATANABE and Yasuhiro KOIKE

(Accepted Jun. 23, 2020)

Key words : anger, cognitive, gender difference, high school students

Abstract

Anger management in high school students is a high-priority issue because of related health and psychosocial problems, including self-injury and harm to others. The purpose of this study was to exploratory to investigate the cognition of events that evoke intense anger in high school students. A questionnaire using the free description method was administered to High school students (N=327), and 311 responses were collected. Data without missing values (N=301) were analyzed using Berelson's content analysis method. Moreover, the agreement rate of the classification was calculated using the formula of Scott, W. A., to confirm the reliability of category classification. For the gender difference, a χ^2 goodness-of-fit test was performed. Three categories that were identified for recognizing events evoking intense anger in high school students were other-attribution recognition, self-attribution recognition and self-control recognition. Other-attribution recognition and self-attribution recognition occupied over 90% of the categories. The agreement rate of the classification calculated using Scott's formula was over 80%, which satisfied criteria. Above results provided suggestions on developing effective methods for prevent self-injurious behaviors of high school students.

Correspondence to : Michiko ISHIDA

Department of Nursing
Faculty of Nursing
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : m-ishida@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.30, No.1, 2020 311 – 319)